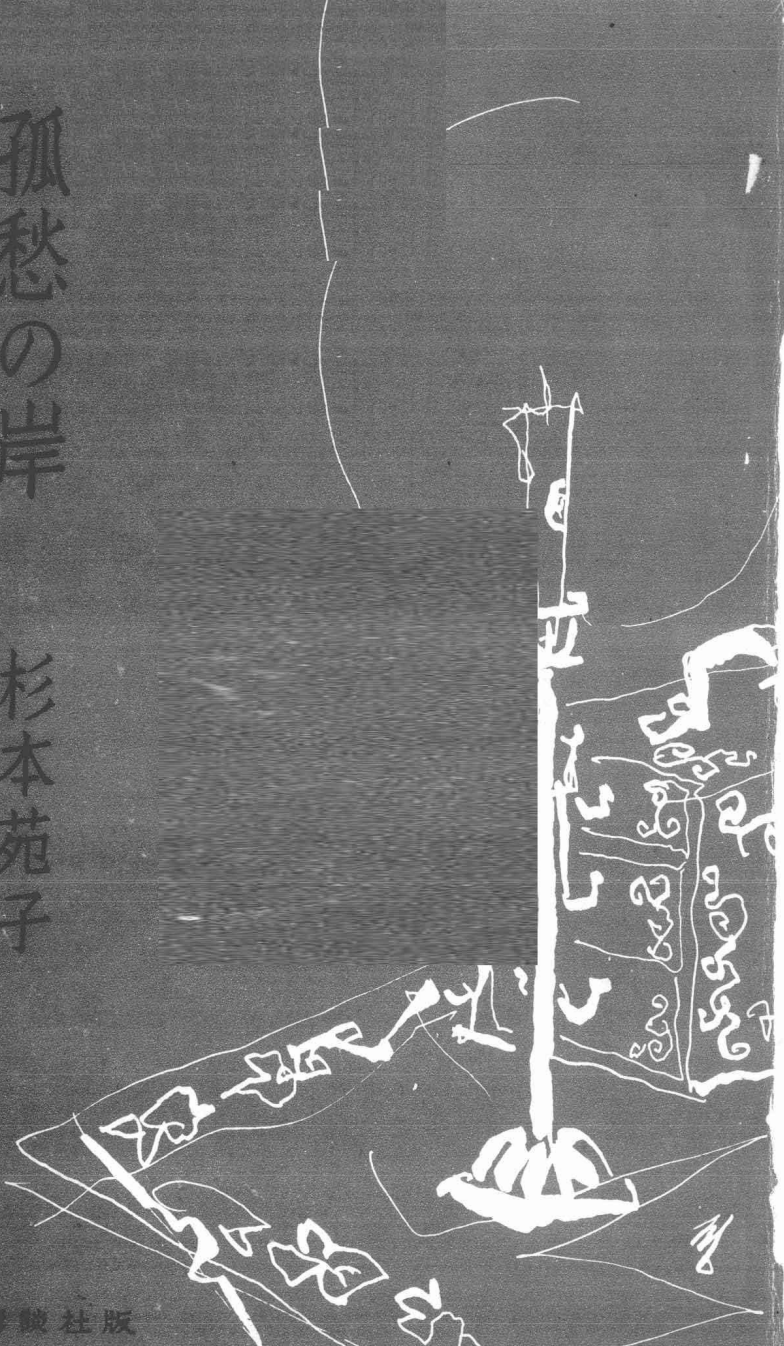
孤愁の岸

杉本苑子

孤愁の岸

杉本苑子



講談社版

孤愁の岸

著者との
話合いにより
検印廃止

昭和三十七年十月二十五日第一刷発行
三六〇円

著者　杉本苑子
東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者　野間省一
東京都文京区大塚坂下町一一四

印刷所　豊国印刷株式会社
東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所　株式会社　講談社
振替　東京　三九三〇
電話東京(941)三一一一(大代表)

(製本　文信社)

杉本苑子　一九六二

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

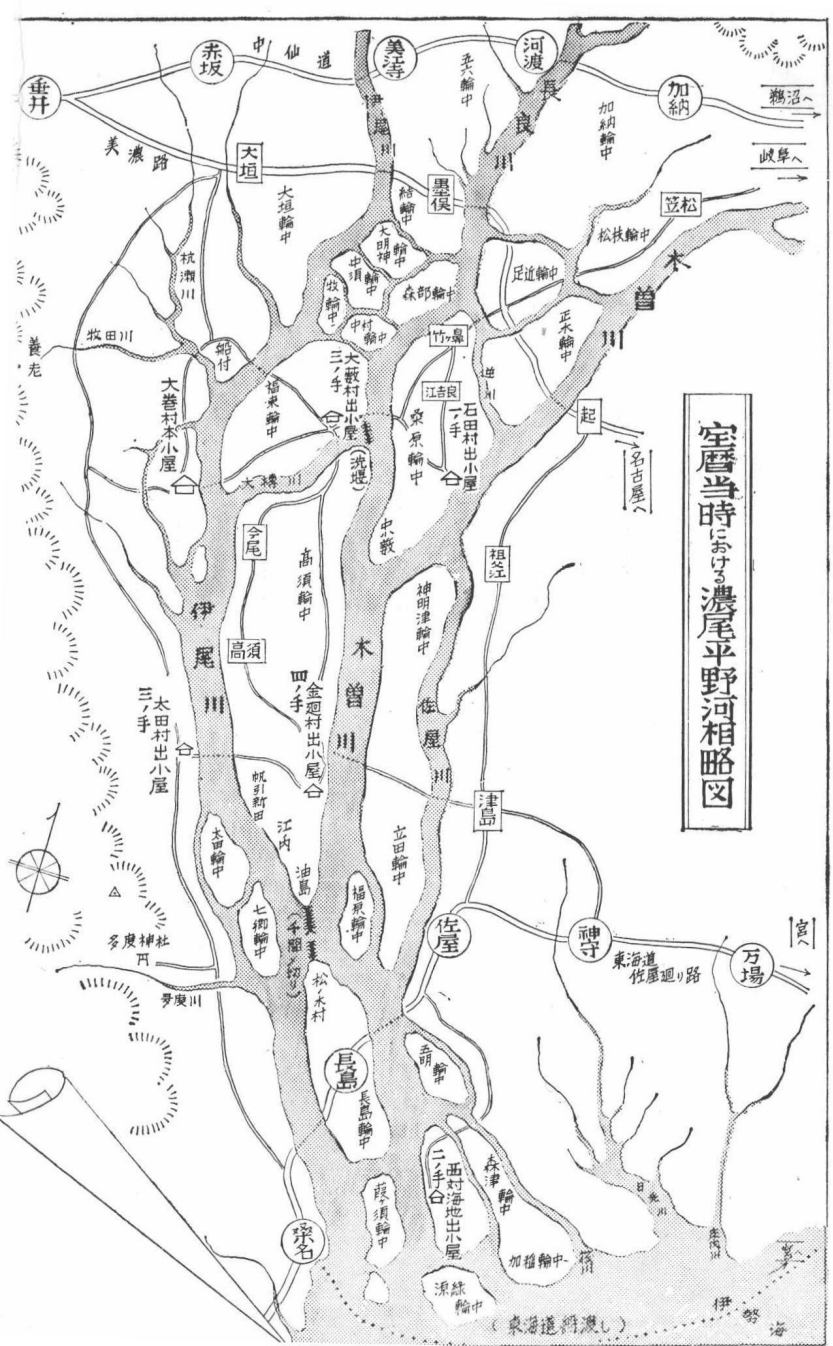
目次

奉書一片……七
古帖佐の碗……一八
光る白髪……二三
夕映童女……三一
いざよい日記……四〇
餌と商人……四五
露、撩乱……五七
天井川……六八
初犠牲……七九
花あやめ……九五

雉子汁……一〇四
ある手紙……一一三
籠伏せ論争……一二四
夏の月……一三三
病鬼……一四一
若き藩主……一四五
奈落への道……一五〇
母の丁銀……一五七
宵時雨……一六四
馬蝿庄屋……一六九
頭巾の男……一七七
見積りくらべ……一九〇
陶鈴……一九六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

壁の裏……一九八
断絃……二〇三
伊吹風……二〇九
風に哭く声……二一六
野の落日……二二二
多度山浅景……二二六
風花……二二七
片側町……二四二
銀紗一望……二五二
紅梅譜……二五六
河満てり……二六一
一穂の灯……二六九
流星……二七二


室暦当時における濃尾平野河相略図
垂井
赤坂
美濃路
中仙道
美濃寺
河渡
長良川
加納
鵜沼へ
岐阜へ
大垣
墨俣
笠松
木曽川
杭瀬川
牧田川
養老
船付
大巻村本小屋
福東輪中
大榎川
大戸村出小屋
三ノ手
(洗堤)
竹ヶ鼻
江吉良
石田村出小屋
一ノ手
逆川
起
名古屋へ
今尾
高須
伊尾川
高須輪中
中戸
祖父江
神明津輪中
佐屋川
津島
太田村出小屋
三ノ手
金廻村出小屋
四ノ手
帆引新田
江内
油島
立田輪中
福原輪中
七郷輪中
佐屋
神守
東海道
佐屋廻り路
万場
宮へ
杜神
多度
円
多度川
松ヶ木村
長島
長島輪中
西村海地出小屋
二ノ手
森津輪中
殿須輪中
桑名
加稲輪中
源緑輪中
日光川
伊勢海
(東海道)

孤愁の岸

装幀　三井永一

奉書一片

盤上に落していた視線をあげて、平田靱負はかたわらの障子を見やった。門か、玄関口と思われるあたりで人のざわめきが聞えている。聞えるというよりは、波動となって皮膚に感じられてくると言いたいほどかすかな、しかし、どこか緊迫を含んだ人声なのであった。

碁の相手をしていた笈川鉄之助も、平田の動作に誘われたらしい。湯呑へ伸ばしかけた手をそのまま、ふっと外の気配に耳を澄ませる表情になった。ざわめきは止み、こんどは蹄の音が一騎、築地外を西へ、あわただしく遠のいてゆく……

「見てまいりましょう」

たとうとする笈川を

「いや、その必要はなさそうだ。待って居ればよい」

と、平田は制した。——なるほど、渡廊を離れへ向けて、小刻みに近づいてくる跫音がある。

——薩摩藩、鹿児島城下。七草は過ぎたが、まだどこかから琴の音、屠蘇の香など漂って来そうな、生温い新春の一宵なのである。

跫音は部屋の外にとまり

「申しあげます」

声とともに障子が開いて、敷居ぎわに手をつかえたのは平田家の家扶、宮増外記だった。

「ただいま城中より『申し談ずる儀あり、即刻、登城せよ』との召し触れがまいりました」

と、外記は口早やに主人へ告げた。

「急のお召し？」

平田は眉を寄せた。

「この時刻に召し触れとはただ事でないが……御用の趣きは申さなかったか」

「何事も。——ただ、触れは御当家ばかりでなく、御家老座ひとり残らずに廻ったもようでございました」

握っていた白石を、平田はザラと碁笥へもどした。そして

「聞く通りだ」

と、笈川をうながした。

「出仕せねばならぬ故、この勝負は明晩まで持ち越すことにしよう」

「かしこまりました」

笈川はすぐ碁笥の蓋をとじた。

直属の部下たちの中でも、算用方吟味役をつとめるこの笈川鉄之助の、考え深い穏やかな性を、日ごろ平田は愛していた。三十四という年のわりには、笈川はもの腰も落ちついた寡黙な侍であった。

「面白い碁になりそうだったが……明日もまた忘れずに相手をしに来てくれるように」
と、座を起ちながら平田は微笑した。
「はい。――では、私はおいとま仕ります」
「ごくろうだった」
うなずき捨てて、笈川より先きに平田は離れの書斎を出た。
……納戸では妻女のりえと、家僕の佐田恒弥とが、出仕の支度をととのえて主人を待ちうけていた。
「何ごとのお召しでございましょう。いま時分……」
不安げにたずねるりえへ
「書状が来ていたようだが、どこからか？」
平田は逆に問い返した。
「申しあげようと思っていたところでした。――天満屋のお内儀からでございます」
「大阪の御金御用達か」
「はい。天満屋十兵衛どのの御内儀から無沙汰の詫びをかねて、娘御の嫁入り先きが決ったことを、わたくし宛てに知らせてまいった書状でございました」
りえの声音はやわらかく細い。盛りのころのなまめきが、みずみずしくまだ残っている。
（声というものは老いないのか）
とは、妻の物言いに包まれるたびに平田の感じる疑問だった。
裃、そして袴……身支度の手を休めずに平田は応じた。
「天満屋十兵衛の娘は、たしかお秋という名であったな」
「子がらの良いお子でした。さぞ美しい娘に成人したことでございましょうね」
「何ぞ祝い物を贈らねばなるまい」
「茶に堪能とか聞きましたので、香合など焼かせては……と考えているのでございますが」
「思いつきだ。そなた、図柄を工夫してやるがいい」
差添えを腰に落しながら納戸を出る平田につづいて、りえが起ち、そのあとに佐田恒弥が主人の刀を捧げて従った。
玄関式台には宮増外記をはじめ、家士たちが十人あまり見送りのため居流れていて、扈従の仲間、草履取りの幾人かは、かがみ込んで提灯に火を入れていた。
「笈川は戻ったか？」
と、その誰へともなく平田は訊いた。
「御帰宅になりました」
と外記が答え、平田は履物に足をおろした。
「おじいちゃま待って。もうすぐ出来るのよ」
呼びかける幼な声といっしょに、この時、五歳になる孫の兵十郎がバタバタ奥から馳け出して来
「いけません。お祖父様は御登城ですから……おとなしくお送りしましょうね」
若い母親の志津江が、これも小走りにあとを追ってき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

た。斉ぬぎに立ったまま
「すぐ出来るって、何がだ？　坊」
持ちおもりのして来た孫のからだを、平田は掬うように抱きあげた。
「あんもちでございますよ」
と、りえが笑顔で注釈した。
「家士たちへの夜食に小豆を煮ているのを目ざとく見つけまして、おじいちゃまと御一緒にいただくのだと、さっきからねんねもせずに待ちかまえているのでございます」
「あんもちか、それは残念だな」
嫁の腕へ幼児をもどしながら、平田も目をほそめた。
「お祖父さまは出かけなければならない。坊は先きに食べておやすみ」
「うん」
聞きわけよく兵十郎はこっくりをし
「お気をつけあそばして……」
「お舅さま、いっていらっしゃいませ」
りえと志津江も、つつましく式台に指をそろえた。
門わきの紅梅は今がさかりだった。甘く、冷たいその香りをくぐって、平田靱負は路上へ歩み出た。
平ノ町の彼の屋敷からだと、俗に千石馬場と呼ばれている通りを東へ、城までは幾丁も無い。
提灯の片明りに照らし出されている平田の軀は、男にしてはやや小柄だが、がっしりと骨組みが張っており、歩速も早かった。五十一という実際の年にくらべると、風貌、身のこなし、ともに若々しくするどい。迫った眉、深い眼光……唇の意志的な緊りにも、かつてただの一度も他人に向って激発したことのない平田の、むしろ沈鬱ともいえる本性とはうらはらな、精悍なものがにじみ出ている。幼い孫に、お祖父ちゃまなどと呼ばれているのが、平田の場合、ひどくそぐわない感じであった。
神農堂の手前にさしかかったとき、すぐうしろに引き添って供をして来た佐田恒弥が
「新納さまです」
と、小声で平田に注意した。同じ夜道を、柑色の光の輪が二ツ三ツこちらの灯を追うように近づいてくる……国老のひとり、新納内蔵の定紋を染めた提灯にちがいなかった。
立ちどまって平田は待った。
「靱負どの、其許もお召しか」
内蔵は大股に寄って来、平田と肩を並べて歩き出しながら
「江戸藩邸より何ぞ申し越してきたのではあるまいかの」
従者どもの耳をはばかってか、長身を心もち屈めてささやいた。
「と言うのも、実は夕刻、身どもの家の婢が街道筋で、お城下さして馳けてくる急飛脚を見かけたと申すのでな」
「飛脚!?」

「夕まぐれのこととてしかとは判じかねたが、胸当ての印も身ごしらえも藩の抱え飛脚によう似ていたという」
江戸表てよりの急飛脚……
ある危惧が、悪寒のように平田の総身を走りぬけた。胸騒ぎと言ってもいいものだった。
「吉凶いずれともわからぬが、何やら身どもには、今宵の召しが禍が禍がしいものに思えてならぬ」
と、内蔵も言った。
「たとえば？」
「たとえば江戸におわす奥方さまの御身の上に、急変が起ったというような」
（……む、これも当然な臆測にちがいない）
と、平田は心中にうなずいた。薩摩守重年の内室村子ノ方は、いま江戸の藩邸で重病の床に臥せっており、今日か、明日かとも、その終焉は危ぶまれているさなかなのである。
……平田の惧れは、だが新納内蔵とはまったく別なところにあった。
旧冬――師走のはじめだったが、江戸留守居役佐久間源太夫から平田は一通の私信をうけとっていた。時候見舞やらわたくしの用件やらをこまごまと並べた末に
近ごろ気がかりな取り沙汰を耳にしましたので……
とことわって、次のような一文を佐久間源太夫は附記して来たのである。
これまでとかく荒れがちだった濃尾の野の諸川に、公儀はいよいよ本腰を入れて改修の手を加える肚を固めたもようです。村役どもに工事個所の請願を出させる一方、美濃へは江戸から検分役人を派遣して、綿密な調査をとげさせたとの噂も仄聞しました。遠からず治水工事手伝いの下命が、いずれかの藩へもたらされることでしょうが、この貧乏くじ、何としてでも引き当てぬようにと、我れらをはじめ公辺の内情にあかるい諸家の留守居役、ひとしく兢々として耳目を研いでいる有様です。
（新納家の下婢が目撃したという急飛脚は、もしや……これではないか？）
だが、強く平田はかぶりを振って、我れ知らずきざしたこの恐ろしい予感を胸中から払いのけた。
（外様の諸侯は多いのだ。選りに選ってわが島津のお家に、災厄が降りかかるわけはない）
新納が言うように、急報の内容は村子ノ方のことにちがいない。――そう、是が非でも信じたかった。
（ああ、だが……）
思わず声に出して、平田は呻いた。

（たとえば奥方の御身の上に万一の変が起ったにせよ、その事だけで夜中、国老を非常召集するだろうか？）

御楼門の屋根のゆるやかな勾配は、このまにも一歩一歩、一行の眼前に迫っていた。

島津氏七十七万石の居城鶴ノ丸城は、天守閣、櫓を持たぬ屋形づくりの城である。平田と新納は御楼門を通って、対面所わきから本丸の小書院へみちびかれた。

夜陰の城中は人が少なく、畳廊下など、伽藍をゆくようにうそ寒く、暗い……。曲り角ごとに吊られている掛行燈のまたたきが、かえってあたりの闇をきわ立たせているかに見えた。

二十畳敷きの小書院にも燭台は一基。それと、茶道方の者が運んできた小さな火桶をはさんで鎌田典膳、市来左中の両家老がすでに詰めかけてい、平田、新納よりひと足おくれて、義岡相馬がこれも緊張のおももちで登城してきた。

（何事の召し触れであろう。夜中にわかに……）

とは、当の国老たちばかりでなく、宿直の番士、門卒までがひとしく抱いた不審にちがいなかった。

ところへ小姓が顔をのぞかせて

「殿様、お出ましでございます」

と告げ、国老五人、畳に手を束えるか束えぬうちに、藩主島津重年が上段の間へ姿をあらわした。つづいて首席家老伊勢兵部も入側の廊から入って来、上段したに着座した。

重年は初名を兵庫久門という。先代宗信の異母弟にあたり、早くから島津宗家を出て一族兵庫久季の嗣子となっていた。気ままな別家の身分だった。その彼が大隅、薩摩、日向三州の大守に迎えられ、ふたたび宗家へもどったのは、子無くして早逝した兄宗信の遺志によるのである。病がちな、しかし国政には真摯な熱意を燃やしている二十六歳の青年藩主であった。

「参集ねがったほかでもない」

重年はただちに口を切った。

「今夕刻、江戸詰め家老嶋津主殿、嶋津主鈴の両人より、旧冬十二月二十五日付けを以って、我が藩へ濃尾川普請手伝いの幕命が下ったとの、連名の急報が到着いたした」

突きあげられでもしたように老職たちは面をあげた。とっさには一語を発する者もなかった。彼らを襲った驚愕はそれほど強かったと言ってよい。ことにも先代宗信の代から、勝手方家老として島津家の財政をあずかってきた平田靱負は、佐久間源太夫よりの内報で「もしや？」と危惧していたにもかかわらず

（やはり来たか！　御家にこの災厄が……）

主君の口からまざまざそれを告げられた刹那、あらためて真ッ暗な恐怖と、絶望感に打ちひしがれた。

「江戸家老らの報告には、こうある」
と、重年はつづけた。
「――暮れも押しつまった二十六日、柳営より江戸芝の我が藩邸へ『重役一人、出頭せよ』との切紙がもたらされた由。取るものも取りあえず留守居役山沢小左衛門が登城いたしたところ、御表御殿において老中列座の上、御手伝い下命の奉書を手渡されたという……」
重年はここで言葉を切り、かたわらの首席家老へ
「兵部、その奉書の写し、五人の者へ読んで聞かせよ」
と、低く命じた。昂ぶって来ようとするものを懸命に抑えているのか、重年の語調は痛々しく慄えていた。
手なる紙片をひろげて、伊勢兵部は咳しつつ読みあげた。

濃州、勢州、尾州川々御普請御手伝い仰せつけられ候間、その趣き存ぜらるべく候。もっとも此の節、参府に及ばず候。恐々謹言。
宝暦三年十二月二十五日

西尾隠岐守忠尚
松平左近将監武元
本多伯耆守正珍
酒井左衛門尉忠寿
堀田相模守正亮

松平薩摩守殿

文中に『美濃、伊勢、尾張の川々』とあるのは、木曾川、長良川、伊尾川の三巨川と、それらにまじわる枝川をひっくるめて称したものであり、連署の五人はそれぞれ幕府の閣老だった。
参覲交替で江戸へくだる途中、薩摩藩主は近江の草津追分から尾張名古屋のあいだ、東海道をへずに近江路、美濃路を通るのを、代々の例にしている。鈴鹿峠の険阻、四日市から熱田の宮まで海上七里におよぶ船渡し……、東海道のそうしたわずらわしさを避けるためには、少々のまわり道もやむを得なかったのだ。
近江路だと、草津追分から琵琶湖にそって北上し、不破関を越えて美濃へ入る。そして垂井、大垣、墨俣、起の宿宿をすぎて尾張名古屋に達するわけである。
薩摩の人々は藩主も家臣もが、したがって濃尾の野のひろさ、河相の複雑さ、出水のさいの恐怖までを、よそながら耳にし目にも見て、よくよく承知していた。
怒りやすく、荒れやすい濃尾の川々。だが彼らの持つ豊かな水量は、一方に稲の根をうるおし、香ぐわしく土を肥やしてゆく……
この野に幕府は十一万七千石の公領を、御三家のひとつ尾州徳川家は十一万九千石の所領を持っている。桑名藩、高須藩、大垣藩、――群小諸藩を合せれば、濃尾平野の米のとれ高は六十四万五千石にものぼるのである。

幕府にしてみれば、ぜひとも守りぬきたい穀倉であり、そのためには水との闘いを覚悟しなければならない。あまりな大工事ゆえに、ながいあいだ踏み切る決心のつかなかった濃尾川普請ではあるが、ここに至って、ついに幕府も修築の肚を固め、『手伝い』を島津家に命じて来たのであろう。

普請手伝い——

それは人夫人足の傭い上げとその賃金、諸資材の購入費等、経費ほとんどの負担を意味する。大名諸侯の財力をそぐために、幕府が好んで用いた手だった。わけて島津家は外様の雄藩。幕府にとっては寸刻の油断もならぬ池底の竜である。金蔵には金がうなっているとも見られていた。

が、内実はまったくあべこべだった。

物要りに物要りがつづき、領内上方、合せて銀四万貫、金子にして六十万六千両もの借財に、島津の家中はいま、喘ぎぬいているさなかなのである。

——十八代島津家久のとき、薩摩藩は公儀のゆるしをえて南の島々へ遠征し、琉球王国を属領にした。以来、米、砂糖、毛皮をはじめ貢ものはおびただしい数にのぼったし、琉球を中つぎ場として中国その他と密貿易する利便も生れた。

こうした宝庫を持つ上に、十九代光久のころには領内に金山が発見された。新田の開発、植林などにも代々力をそそいできたのだが、乱世から泰平へ……世相の移りかわりとともに、藩収の増加に上まわって、出費もかさんでくるのはいたし方のないことだった。

江戸、京、大阪、伏見の各藩邸でついやされる維持費、参覲交替の費用、大藩の体面をたもつために必要な賄い、交際費——。そうした定まった支出に加えて、臨時の出費も多くなった。

火事がその一因である。鹿児島城下が焼野原となり、復旧に三年もついやした大火、江戸藩邸の類焼……キリシタン宗徒が島原で蜂起したとなれば、九州大名のひとりとして兵を出さないわけにもゆかなかった。

台風の被害は例年のことだし、桜島の爆発、地震、飢饉……合間には幕府からの取り立てを受けた。

江戸城改築のためという名目で、石綱船三百艘の建造を命ぜられたのが慶長九年……。皇居造営用の木材を、大量に献納させられたこともある。

なかでも打撃は、二十代島津綱貴の時代に受け持たされた東叡山寛永寺の根本中堂新築工事だった。寛永寺は徳川家の廟所だが、この臨時支出によって、ようよう整理のつきかけた財政がふたたび旧にもどってしまった。

二十二代継豊のときには将軍家の姫が継豊の室として輿入れするという大出費に見舞われ、借銀はたちまち三倍にもはねあがった。

幕府の賄い不足をおぎなうために、七千石もの米を上納させられたのも継豊の治世時代である。

借財がふえるにつれて利息の払いも容易でなくなる。二十三代宗信は財政の整理に心身をすりへらし、在位わずか四年、二十三歳の若さで亡くなった。

異母兄のあとを継ぎ、二十四代の当主となった重年にも、同様の苦労が待ちかまえていたことはいうまでもない。年貢米の取り立て増し、田禄税の徴収、藩債の発行等、勝手方家老平田靱負の補佐をうけて、金のやりくりに文字通り骨をけずりぬいて来た矢先きなのである。

厖大な治水工事手伝い……

今ここでそれを甘受すれば、島津藩はたちまち破滅に瀕する。領民の疲弊、藩士の困窮……酸鼻は火を見るよりあきらかだった。

しかし、だからといって、公儀の命が拒否できようか。いや、拒否はできる。が、そのためには天下を敵に廻して戦う覚悟をしなければならない。破滅はやはり同じなのであった。

(どうする? ——どう切り抜けるか、この国難を……)

ぎりぎりの厳頭に、重臣たちは追いつめられた思いだった。

奉書の写しは伊勢兵部の手から、五人の国老へつぎつぎに廻されていった。

濃州勢州尾州川々御普請御手伝被二仰付一候間、可レ被レ存二其趣一候。尤此節不レ及二参府一候。

耳で聞いた通り、眼で見ても、たったこれだけの紙面である。字数にして四十字にも足らぬ紙きれが薩摩全土にもたらした打撃の大きさは、だが、軍兵百万にまさるとも劣るまい。

重職たちの眼には暗涙がにじんだ。駭きが去ったあと、彼らの胸底に残されたものは、こらえがたい無念の思いだった。

幕府と外様大名——

言ってみれば征服した者とされた者とのあいだで、武器を執らずにおこなわれる戦い……それが今度の御手伝い普請なのだ。

負けることははじめからわかっていても、挑まれれば立ち、挑んだ側の満足がゆくまで敗れてみせねばならぬ悲惨な戦い……。しかしそれを拒めば、さらに大きな取り返しのつかぬ敗れに、破滅に、島津の家中は追い込まれるのだ。打たれ蹴られ、血まみれになりながらも、破滅を救うためには耐え、あくまで相手に許しを乞いぬかねばならぬ戦い……。

(なぜ、このような無惨が許されるのか)

眼に見えぬ何ものかに向って平田は問いかけた。問いかけずにはいられなかった。

(幕府の持つ、これが『権力』というものならば、『権力』とはいったい何なのか!?)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook